

座間の語り伝え

(信仰編)

刊行にあたって

前座間市長 本多 愛 男

座間市の市史編さん事業は、市民の皆様が温かいご理解とご協力により着実な歩みを続けております。

故きを温ね新しきを知るということわざがありますが、座間の歩んできた姿を知り、これからの明るく住みよい郷土座間を築いてゆくことこそ、市史編さん事業のめざすところであります。

このような中で、市史編さん事業の一環として、語り伝え聴き取り調査事業を昭和五十一年度から実施してまいりました。この事業は、長い時の移り変わりの中で、ともすれば消えがちな昔の人々の生活に関する語り伝えを採集し、記録し、永く後世に伝えることを目的として始めたものです。

調査は、市史編さん準備委員会委員の方々

を中心として、市内約三十カ所の会場で行い、対象者は二百人以上にもおよびました。

今回その成果として、『座間の語り伝え』第一集『信仰編』を刊行する運びとなりました。この本は市民の方々がよくおわかりいただけのようにまとめられており、当時の座間の人々の生活や風習を知る上で手引書ともなるように配慮されております。ぜひ市民の皆様にご覧いただき、活用していただくことを願ってやみません。今後もし史編さん事業に皆様の多大なご理解とご協力をいただくことが出来れば幸いに存じます。

なお、刊行にあたり、ご執筆の労をいただきました各氏に対しまして、深く感謝申し上げます。

発刊の経過について

調査団長 大沢 清

急激な座間市の発展によって、郷土の生きた生活の記録や資料が、日に日に消滅していくなかで、出来る限り郷土の先輩から昔のこゝとを伺い、それを記録にとどめて後世に語り伝えたいとの願いから、昭和五十一年度・五十二年度の二か年にわたり、語り伝え聴き取り調査を行いました。

これは、座間市教育委員会の委嘱を受けた、座間市史編さん準備委員会が計画したもので、準備委員会がこの調査に当たり、円滑にしかも効率的に行われるよう各地区に調査協力員をお願いし、地区との緊密な連係の下に実施しました。幸い、調査協力員ならびに調査対象者の方々は、準備委員会のこの計画に心から賛同され、深いご理解と意欲的なご協力を賜ったのであります。

初年度は、新旧の別なく全市を対象に行つたもの二十一会場、特別項目を設定して行つたもの三会場、計二十四会場で、次年度は、調査項目の関係から旧地域に限定し、十会場で調査いたしました。二か年にわたるこの調査で、調査協力員は延べ五十名におよび、調査対象者は優に二百名を越え、消え去ろうとしていた幾多の貴重な資料を、収録することが出来ました。

一応資料が収集された段階で、座間市史編さん準備委員会は発展的に解消し、新たに、座間市の付属機関の設置に伴う機構改革によつて、昭和五十三年度から、市の総務部企画課内に市史編さん係が設けられ、語り伝えのまとめはここに引き継がれました。

語り伝えのまとめを委託された、座間市語り伝え聴き取り調査団は、鋭意その原稿の取りまとめにかかり、資料の不十分な点についてはさらに追跡調査を行い、その補完に努めてようやく稿を終えた信仰編を、語り伝えの

第一集として刊行する運びとなりました。

本稿において、各地区対象者の方々の生の声を充分活かすことが出来なかつたことを、お詫び申し上げますと共に、皆様の声を収録した語り伝えの原本を数部製本し、貴重な座間市史資料として、永久に保存させていただきま

す。ここに、刊行に至るまでの経過を申し上げます。ご協力を賜りました関係の皆様には厚く御礼申し上げます。

(昭和五十四年十月)

座間市史編さん準備委員会委員

語り伝え聴き取り調査協力員

◎委員長 (敬称略)
○副

昭和五十一年度

飯島忠雄(長宿) 飯島忠雄

○長谷川泰雄(新田宿) 井上治夫(皆原)

金子皓彦(大和市 富士見が丘) ○長谷川泰雄

曾根幸雄(上栗原) 江原貞義(ひばりが丘)

角田俊久(相模原市 磯部) 金子皓彦

野島 正(谷戸) 野島 正

◎大沢 清(芹沢) ◎大沢 清

小泉豊治(四ッ谷) 小俣国栄(下宿)

白井光信(鈴鹿) 小泉豊治

鈴木英夫(河原宿) 白井光信

鈴木芳夫(同) 瀬戸正夫(相模台)

鈴木英夫

鈴木芳夫

(いろは順)

四ッ谷 川島孝升 川島寿雄

新田宿 小池知治 宮代 豊

座間 野口徳重(河原宿) 小俣国栄(下宿)

鈴木 茂(中宿) 若林 勇(上宿)

高橋 勇(中河原) 古市静子(河原宿)

入谷 一杉直之(鈴鹿) 瀬戸良治(長宿)

野島利亮(星の谷) 田中喜作(谷戸)

井上治夫(皆原) 芥川稻太郎(皆原)

栗原 大木 進(小池) 大木 馨(上栗原)

井上和三郎(上栗原) 大矢竹松(中栗原)

大沢 功(芹沢) 大矢忠蔵(下の上)

大矢靖治(中下) 大矢太市(中下)

大矢 茂(大下) 鈴野寿一(大塚)

小松原 遠藤利文 加藤政吉

相模台 中村浜作

相模台 松岡兵治

ひばりが丘 江原貞義

語り伝え聴き取り調査対象者

() 内昭和五二・四・一現在満年令 (順序不同)

四ッ谷

川島重之(80) 川島豊治(74) 川島佐重郎(71)

川島八重吉(73) 鈴木隆蔵(68) 川島岩雄(71)

佐藤薫治(79) 佐川マス(78) 佐藤ソメ(86)

新田宿

岩堀寅吉(86) 本多菊近(80) 清水 重(76)

本多唯吉(77) 香川隆治(72) 齋藤 泰(70)

大矢儀三郎(87) 本多伊助(75) 本多勝司(78)

池上みよ(72) 齋藤つね(75) 本多あき(75)

河原宿

野口麻吉(85) 武藤浜則(85) 小林光太郎(81)

下宿

香取光清(91) 片野与作(80) 黒沼半平(76)

若林定重(75) 林直三(74) 小俣 馨(59)

鈴木キヨ(84)

中宿

片野孝祐(68) 瀬戸勘一(82) 瀬戸藤兼(82)

瀬戸俊孝(61) 片野ヤマ(81) 稻垣セイ(70)

上宿

山本繁治(83) 加藤信一(82) 菊田春子(69)

稻垣房吉(69) 若林喜伴(83) 加藤キヨナ(76)

中河原

沢田隆幸(66) 沢田 亮(64) 沢田 正(63)

沢田和孝(59)

鈴鹿・長宿

一杉ミナ 遠藤儀平(80) 瀬戸英幸(81)

増島信義(80) 吉村通玄(73) 齋藤ミツ(80)

星の谷・谷戸

星野浜次(85) 遠藤昇之助(81) 野島利亮(77)

入部金次(72) 加藤定雄(79) 加藤ツネ(74)

野島ナヲ(74)

皆原・羽根沢

飯島良治 (78) 奥津惣治 (77) 沢田盛造 (70)
一杉直之 (83) 一杉正義 (83) 沢田カズ (79)
沢田サワ (79)

小池

大木 茂 (74) 草薙光次 (74) 加藤貞雄 (70)
鈴木直蔵 (82) 加藤初太郎 (72) 大木キク (72)

上栗原

鈴木将英 (75) 井上和三郎 (77) 曾根徳勝 (79)
鈴木公平 (71) 曾根 稔 (70) 大木 馨 (78)
曾根ハツ (64)

中栗原

小泉 繁 (76) 鈴木近司 (80) 大矢キク (80)
大矢平三 (74) 大矢ヨシ (84)

芹 沢

大矢庄作 (76) 飯島吉之助 (74) 大矢菊次郎 (71)

中戸川キン (85)

大沢 功 (88)

石垣マツ (72)

下栗原上

中村保蔵 (82) 大矢藤吉 (76)
大矢忠蔵 (76) 大矢高義 (67)
中村スメ (77)

中村教治 (67)

中村キタ (72)

中 下

渋谷孫市 (86) 渋谷利光 (68)
大矢正松 (80) 加藤タケケ (67)
大矢ヤス (73)

大矢太市 (68)

大矢フミ (70)

大下・大塚

大矢良孝 (58) 大矢寿男 (64) 大矢儀則 (71)
中村得蔵 (75) 大矢芳松 (83) 大矢武雄 (76)
鈴木寿一 (76) 大矢 茂 (68) 大矢満喜枝 (57)
大矢サダ江 (55)

小松原

野口武夫 (60)

芥川 茂 (55)

鈴木和男 (56)

相武台

山田磯吉 (52) 野口蓮治 (68) 鈴木墨吉 (81)
遠藤利文 (67)

片野 豊 (54) 城條道善 (68) 野島寿雄 (71)
太田 資 (75) 中村浜作 (69) 加藤政吉 (73)

相模台

安斎芳太郎 (85) 小滝秀四郎 (82) 松岡フミ (82)

ひばりが丘

市川貞三 (81) 中村正寿 (60) 三浦正策 (74)
西山 茂 (66) 江原貞義 (78)

前記以外に、調査員にご協力賜わり
資料を提供下さった方々に、厚く御
礼申し上げます。

目次

信仰編	執筆者	大沢清		
一、神社	1		
(1) 氏神と氏子	1		
(2) 市内のお宮	2		
(3) 合祀によって消滅した社	18		
二、寺院	20		
(1) お寺と檀家	20		
(2) 市内のお寺	21		
(3) 廃寺	29		
三、民間信仰	31		
(1) 諸々の神と仏	31		
(2) 講について	37		
四、俗信	44		
(1) 妖怪	44		
(2) 予兆	46		
(3) 禁忌	47		
(4) 雨乞い	49		
五、民間療法	53		
(1) 民間薬	53		
(2) 呪い	54		
付録				
座間市略図				

信仰編

一、神社

(1) 氏神と氏子

座間市内のお宮を尋ねてみると、その創建に伝説を伴うものがある。例えば、鈴鹿神社・座間神社あるいは護王姫社で、それがどの程度の信憑性を持つかとなると、話は別である。既に郷土史研究家は、護王姫社は鈴鹿神社と同様、素戔嗚命を祀った午王社ではないかと、疑問を投げかけている。

しかし、永い歲月代々語り伝え、言い伝えられ、地域の人々に信じられてきたことと、その伝承は大切にしたいと思う。

市内に祀られている神々は、その土地その村によって違うけれど、他所からの招来の神である。何かの機縁で他国の有名な社に詣うで、その折、ご神体を分けて来て祀るとか、

先祖がその故郷のお社のご神徳を偲んで、招来したものである。

なかには変わったものとして、新田宿の専念寺境内にある瘡守稲荷のように、当時江戸市中に流行した流行神を招じたものがあり、上栗原の北向庚申神社のように、信者の願いがかなえられたものが機縁となって、路傍の庚申塔が神社として定着したものもある。

このようにして祀られた神々は、それぞれ地域住民を悪疫や災害から守り、生業の繁栄をもたらすものとして、農民の信仰を受け、数百年に及ぶ氏神と氏子の関係は、信仰を媒介として続いたのである。

氏神と氏子の関係をさらに探究してみると、祀られた神々は庶民の生活に直接関連をもっている。新田宿の諏訪明神は農業の神であり、小池の弁天様、下栗原の龍蔵様は、名称は違っても共に水神で、宇迦の神すなわち稲の守護神といわれている。この外、中河原・上宿・皆原にある大六天様は風神で、ひたす

ら、台風の災害から逃れようとした農民が、願いをこめて祀ったもので、星の谷の三峯神社は火伏せ盗難除けの神様で、火災や盗難等の災害から住民を守って下さるという。

また、神社で行なう神事もお社によって多少違うとは言え、五穀豊穡を祈る祈年祭を始め、例大祭・風祭等、農民の生業発展に関する行事が行われてきたのである。

こうして氏神は、家庭や地域の幸福と安全を守り、繁栄をもたらす神で、庶民から崇められた。下栗原の龍藏社に見られる様に参道を穢しては恐れ多いと農道を別に作ったとか、河原宿の大神宮を寄せ宮しようとした時、氏がソッと竹藪の中に隠して、自分達の氏神様の安泰を計った話は、氏神と氏子の関係を如実に示している。これもひとえに何百年という永い歴史に育まれた、信仰という太い絆で結ばれたからだと思う。



鈴鹿明神社

明神様の鳥居の再建のことが記され、入谷村・座間宿村双方の役員が協議して、鳥居の材料、山出しの人夫、大工、さらには完成祝の諸経費まで、両者が折半で負担し合って完成したという。この様な記録から推して、永年にわたり座間・入谷の二ヶ村が、明神様のお祭を合同で行っていたことが伺える。またお

(2) 市内のお宮

鈴鹿明神社 旧郷社

御祭神 伊邪那岐命・伊邪那美命

素戔鳴命

入谷地区の氏神

お神輿の社として、市民から親しまれている鈴鹿明神社は、昔、座間郷の総鎮守として崇められたお社である。

伝説によると、欽明天皇の御代、今から千四百数十年前、三重県鈴鹿神社の神輿が海上を渡御されていた折、にわか嵐に遇い流れ流れて、当時、入り海だったこの地に漂着されたのを里人が祀ったという。この社には、参道を挟んで東西に池があった。東の池は飯島製材所の裏手に当り、西の池は市役所中央庁舎の辺という。今はどちらも埋め立てられてその面影は残っていない。

数年前、座間の旧家から古い日記が発見された。それによると、元文四年(二四〇年前)

祭の際、神輿を布屋の屋敷現在の齊藤電気店の所に置き、また隣の稲垣小太郎氏の前の道路脇に、提灯掛に使われた石があったということもうなずける話である。

鈴鹿明神社と、海老名市上郷にある有鹿神社とは深い係わりがあった。有鹿神社の祭礼は、六月十三日から十六日までの四日間とされ、このお祭には、有鹿の神輿が相模原市勝野の有鹿谷まで行き、「水もらいの神事」をして一泊し、翌朝帰る慣行があった。この時、入谷では明神の神輿を担いで、大縄道―市役所南側の道―を通り河原宿の鈴木英夫氏前で有鹿の神輿と落合い、その先導となり勝坂まで行き、お祭を共にして次の日鈴木氏前で別れたという。その折に、入谷・座間両村の名主がそれぞれ五名お伴に加わったとのことである。この様な行事が行われたのは、座間から海老名にかけての広大な水田を潤おす用水の確保を、祈願する神事であった。農民にとって耕作用水は生活がかかっていたので、そ



勇 莊 な 神 輿

れを確保することには、皆、真剣だった。

そのため、水争いは随所に起ったようである。水争いで最も大きい事件は、明治八年頃海老名側との紛争である。その年、座間側で鳩川用水を海老名に十分送らなかつたために起きたもので、栗原の名主大矢弥市が調停に立ち、一旦は収まったかに見えた。ところが

入谷の農民がこの調停を不満とし、有鹿神社の「水もらいの神事」に参加しないと言いつ出した。困った海老名側が詫を入れてようやく収まったものの、この争いで有鹿神社の祭典が一日延期された。

水争いとは別に、入谷と座間が完全に別れた明治十三年六月には、座間の若い衆が、鈴鹿明神の神輿がミソギに座間分の鳩川用水を使うのは承知出来ない、これを強硬に拒んだことがあった。幸い、座間・入谷の役員が双方の間に入り、説得に努めて事なきを得たという。

「例年通り、大門出輿のこと」、明治九年の資料に書いてある。星谷寺前に神輿を出すのが通例で、皆原へは神輿は行かなかつた。皆原は、昔、星の谷村の一部で大門まで神輿が行けば、皆原へ行ったも同然と受け取られていたようである。神輿が皆原地区を巡幸するようになったのは、明治二十三年ごろだろうと言われている。

なお、星谷寺前に神輿を出したのは、星谷寺が鈴鹿明神の別当で神社は寺の支配下にあった。そうした関係から例祭に当っては、星谷寺の住職が先にお祭の「祭文」を読み上げ、その後続いて神官が「祝詞」を上げる仕きたりであった。星谷寺の前に神輿を出したのは当然のことと言える。

現在使われている神輿の重さは、二二二・五キロ、約六十二貫で、力のある十八名の氏子が担当地区を交代で練り歩いた。この神輿は大正八年、横浜の業者によって修理塗装が行われている。

例祭は八月一日で旧暦の八朔やっしやくの日に当り、稲の豊作を祈願する祭の日で昔から変わらなない。大正のころには前後六日間にわたつたこともあったという。六日という長い間神輿はお仮屋に安置され、各部落から二名あて計六名の者が出て、神輿の番をした。これを天王番てんわうばんといふ交代で番に当つたのだが、お仮屋はぐらぐらするし、簾蚊には刺されるし、苦勞

は並大抵ではなかつたという。こうした氏子の陰の苦勞が支えとなつて、毎年にぎやかなお祭が営まれた。

諏訪神社

御祭神 建御名方命
鈴鹿ならびに皆原地区の氏神



諏 訪 明 神

諏訪神社は、享保九年十二月（二五五年前）再建の棟札があり、信州の諏訪大社の末社である。昔、信州ゆかりの者が、故郷の氏神を慕って勧請し祀ったものを、地域の人々が引き継いできたものという。

このお社は、相模十三社の一社である石楯尾神社と伝えられる。真偽は別として相当古くから、この地に祀られていたようである。例祭は四月十七日に行われる。

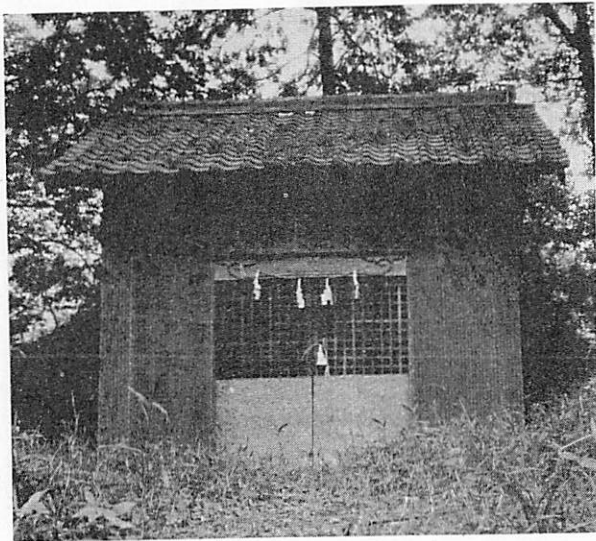
三峯神社

御祭神 火産靈命ヒムツノミコ

星の谷・谷戸地区の氏神

火難盗難除の神として有名な火産靈命を祀る社で、地域の崇敬を受けている。いづころ建てられたかは判然しない。明治四十三年九月、一旦鈴鹿明神社に寄せ宮されたが、また別れて現在に至っている。

例祭は毎年四月三日に行われ、明治末の寄せ宮以前には、お祭の時奉納芝居が上演され



三 峯 神 社

たという。

金比羅社

御祭神 大物主大神

皆原の氏神

創建は、江戸時代中期と言われるが判然しない。境内には北から秋葉社、中央に山王社、

南に金比羅社が祀ってあったが、現在は、一つの社殿にこの三社が合社されている。このあたりを山王峰というので、山王社が元であったようである。

明治四十三年九月、鈴鹿明神社に合祀されたが、この合祀に関係した役員の家が次々と火災に遭い、これは金比羅様の祟りだとい



金 比 羅 社

ので、大正十年ごろ、元の所へ戻して祀ったという。

例祭は十月十日に行われている。

護王姫社

御祭神 護王姫大明神

安産の神

星の谷にあって創建の年代は判然しない。伝説によると、昔、源義経の妻護王姫が、兄源頼朝に追われて奥州に逃れた夫義経の後を慕って、ここまで来たが難産のため亡くなった。その護王姫が、円教寺の開山日範上人の夢枕に立ち、

「私は難産のため苦しんで死んだが、未だに成仏できません。二、三日のうちにこの寺に徳の高い僧が来られるはずですので、その方に頼んで、私の墓の前で供養をして、私を成仏させて下さい。成仏ができた暁には、お産で苦しむことがないように産婦をお守



護王姫社

外に絵馬も出していた。安産祈願にお参りした際、お社の絵馬をお借りして家に持帰り、絵馬を飾って安産を祈った。無事に出産した家庭では、御礼参りの時新たに絵馬を買い求め、借りた絵馬に添えてお社に奉納したという。

十月十七日のお祭には、現在、安産の護符だけが頒布されている。

境内にある相生いの大樺は、根囲りが六・八m、高さ約二十m、樹令は三百年を超える大木で、市の天然記念物に指定されている。

座間神社 旧村社

御祭神 小碓命こすねのみこと（日本武尊）

座間地区の氏神

りいたします。」

と告げた。二、三日して日蓮上人が身延山から東京池上の本門寺へ行く旅の途中、円教寺へ立寄られた。思い当ることのあった日蓮上人は日蓮上人にお願いして護王姫を厚く弔い、一字の堂を建てて祀ったという。

昔から、安産の神として崇められ、護符の

伝説によると、欽明天皇の御代、今から千四百数十年の昔、この地方に悪疫が流行して村人が大変苦しんだ折、白衣の老人―飯綱権現の化身―が現われ、山すそから湧き出る清水を使うがよいとすすめた。人々はその老人



座間神社

のお告げに従い、こんこんと湧き出る霊水を汲んで飲料水とした。

さしもの疫病も治まり、村民は救われたという。神徳に感激した人々は、この地に飯綱権現を祀ったのが、お社の起りといわれる。境内の南西の辺に、霊泉が湧き出していた「泉水」の聖域が保存されている。

この社は、昔、飯綱社と言われていたが、明治九年十一月、座間神社と改称された。

御神木を「相和の鑑」といい、杉の古木で目通りの周囲が三・三m、途中から山桜が生えた大変珍しい御神木であったが、昭和四十七年の台風で倒れたので伐採された。

高い石段を上った左手の小高い所に、

明王山にあった明王社、

富士山公園内にあった浅間社、

座間キャンプ内にあった天神社・山王社

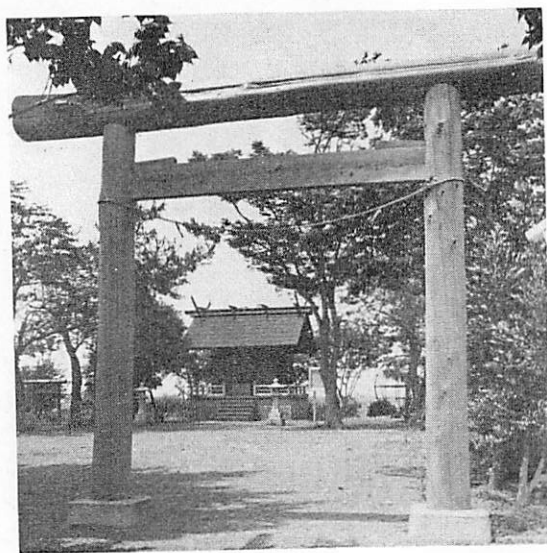
、道祖神、

境内にあった蚕神社、

の六社の碑が並んでいる。これは座間地域内に祀られていた神々を、明治四十二年、座間神社に合祀した時、社名を永久に伝えるため建立したものと思われる。

例祭は八月三十日に行われ、芸能公演の外に、元気な子ども囃子が奉納される。

大神宮



大 神 宮

御祭神 天照大神
河原宿の氏神

江戸の初期に田んぼをひろくため、砂利や玉石を積み上げて高い土手を造った。そこに村人が大神宮を勧請した。境内に大きな松のあったことや、高土手の造成などから推して、慶長のころに建てられたものであらうと言わ

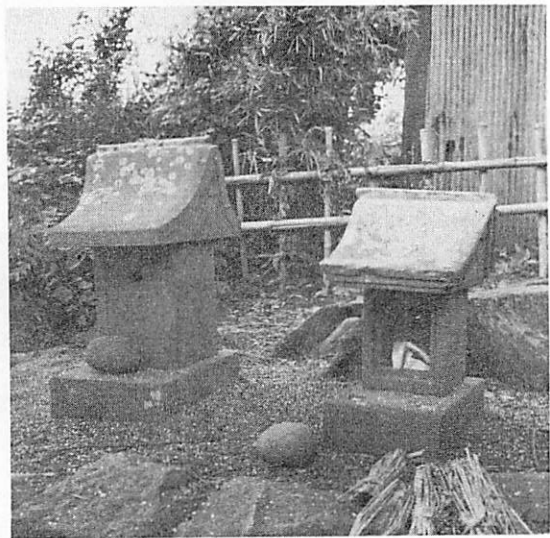
話である。

例祭は十月八日に行われている。

大六天

御祭神 大六天
中河原の氏神

大六天は非常に数が少く、この近辺では市



中河原の大六天

れていたが、最近、お宮の棟札が発見され、創建は慶長十九年（三六五年前）であることが判明した。

大神宮のある河原宿と四ッ谷の丁度中間にあった中橋付近を、鳥居場といった。大神宮の一之鳥居が建っていた所らしい。地域の人が一生涯に一度の願いをこめて、お伊勢詣りに行く時はこの鳥居場に集り、見送りの家族もここまで来て道中の無事を祈って送った。

社の伊勢神宮の神璽は、現在鈴鹿明神社が保管している。天の字を上書き周りに火炎のある印で、明神様のお札に押ししてある。

明治から大正にかけてお宮の合祀が行われた。たまたま内務省の係官が、寄せ宮したかどうか河原宿へ調査に来るといふ。これを聞いた河原宿の氏は、急いで大神宮を藪根に現在の小湊重利氏宅付近の竹藪の中にソッと隠した。大正五年か六年ごろといふ。

三百数十年にわたり地域の守り神として崇めてきた、氏神に対する庶民の心情が窺える

内の上宿・皆原と厚木市の金田にある。大六天は風の神でインドの方から伝わったらしい。御神体は男神の立像で肩に大きな袋を担いでいるといふ。

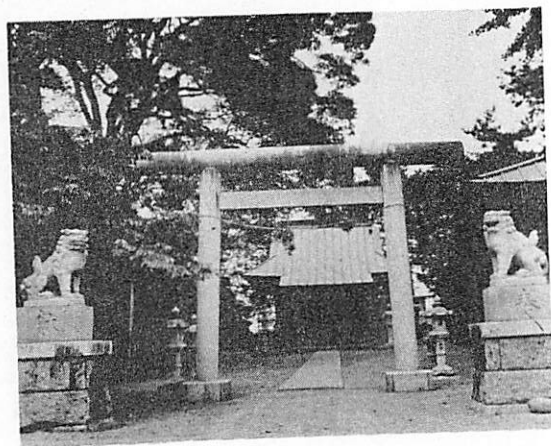
文久二年（一七年前）かに祀ったといわれ、ここに移り住んだ人々が、生活に直接大きな影響をもたらす台風を忌み、風神の御心を鎮めるために祀り、稲の豊作を祈願したものとされる。境内に稲荷社が合せ祀られている。

例祭は十月九日に行われる。

諏訪明神 旧村社

御祭神 建御名方命
新田宿の氏神

言い伝えによると、慶長九年（三七五年前）神官新田氏の祖昌清という方が、信州からこの地に移り住み、故郷の諏訪大社のご神徳をしのび、御霊を分けて祀ったのがお社の起りといふ。



神 明 訪 諏

川にも鮭が上ってきて、新田宿の東を流れていた小川に鮭の姿を見たという。何時の時代か判らないが、鮭の豊漁を祈って、鮭神社が生まれたものと思われる。

この外、境内に市の重要文化財に指定された、修験道の開祖、役行者の記念碑とみられる、「神変大菩薩」の碑が建っている。

例祭は十月七日に行われる。

日枝神社 旧村社

御祭神 大山咋神

四ツ谷地区の氏神

昔、四ツ谷の鎮守は天神社で、ここに移り住んだ人達が、元亀二年（四〇八年前）に建てたお社といひ伝えられている。

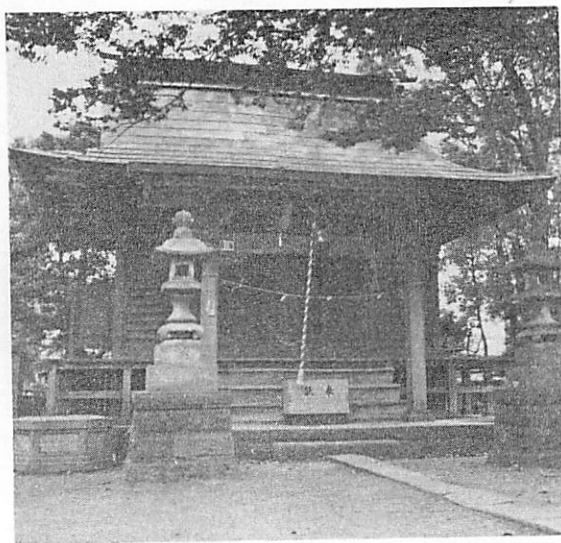
はじめお宮の土地が一町歩余もあったが、永い歳月の間にいろいろ変遷があつて、次第に衰微していったという。大正のはじめごろまで境内には大きな樹木が生い茂り、人々は天神森と呼んで大変寂しい所であつた。現在

境内に傘を拵げたような枝振りの、大きな赤松があつた。お諏訪様の赤松と呼んで人々から親しまれていたが、惜しいことに昭和十二年ごろ枯れてしまった。

境内には、蚕神社・天神社・秋葉社・稲荷社の小祠があり、鮭神社が社殿内に祀られている。古老から伝えられた話では、昔は相模

の天神森遊園地のある付近で、昔の面影は見られない。大正二年四月、県の指令に基づいて、天神社は日枝神社に遷され、合祀された。もともと日枝神社には、古くから山王大権現を祀ったお堂があつて、日吉大社または山王様と呼んでいた所である。

天神社の合祀後、四ツ谷地区でお祭を取り



社 神 枝 日

やめたことがあつた。ところが、百年近く火災に遭つたことのないこの地区で、大正五年から三回ほど続いて火災が起つた。「火柱が立ち、その中に梅鉢の紋がありありと見えた。」

の噂話が、当時の人々の間に囁かれたという。現在、日枝神社の境内には、立派な天満宮の小祠が建てられている。

昭和九年、日枝神社の氏子の代表が、神田明神から御神体を頂いてきて、現在に及んでいる。

例祭は四月二十六日に行われる。

栗原神社 旧村社

御祭神 豊受姫命・天御柱命

若比売命・道反三大神（道祖神）栗原地区の氏神

栗原神社は、明治六年栗原の各小字に祀られていた、王子・龍蔵・握財・絹張・若宮の五社を、栗原地区のほぼ中央に当る王子社に



栗 原 神 社

全長二七m、偉大な御神木をしのんで永遠に記念するとある。樹令七百年を越したと思われる杉の大木が、亭々と聳え立っていたことを思うと、古くからこのお社は、この地の氏神として人々の心を支えてきたといえる。境内にある白樫は、目通り周囲三・六m、樹高二〇mの大木で、推定樹令は五百年前後、昨年度の天然記念物に指定された。例祭は九月三日に行われ、五つの部落、小池・上栗原・中栗原・芹沢・下栗原の囃子連による祭太鼓の競演は、まことに勇壮であり壯観である。

合祀したもので、栗原の総鎮守である。

王子社の創建は明らかでないが、昔、村人がこの地に王子大権現を勧請したお社といわれている。社殿の右横手に杉の御神木の記念碑が建てられている。それによると樹令を全うした御神木は、県神社庁の認可を得て、昭和四十二年伐採された。目通りの周囲四m、

龍蔵社

御祭神 龍蔵大神・天之御柱命

国之御柱命

下栗原の氏神

八軒庭に伝わる三百五十年前の古地図の写しによると、すでに龍蔵様と標記してあり、その場所は、巡礼坂を登った「いっぺい堂」

の辺に記るされている。その後、いつの時代かに中下の西高台に社を移し祀った。

明治六年、いったん栗原神社に寄せ宮したが、また別れてもとの所に戻した。小字の社といっても神楽殿を備え、お祭にはお神楽を奉納したという。

土地の人々は社にお詣りする道を、肥料運

びで穢しては誠に恐れ多いといって、参道の外に農道を作った。当時の人が、氏神様を如何に崇敬していたかを物語る話である。明治三十五年ごろ、この地に悪疫が発生した折、徳生大権現を祀った小祠のある現在地に移したといわれる。

四月三日が例祭とされている。

山王神社 蚕神社を合祀

御祭神 大山咋命

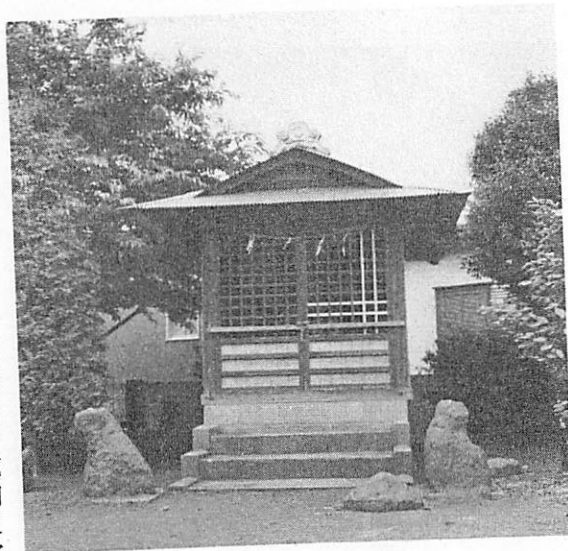
芹沢の氏神

創建の年代は記録がないのでわからないが、戦国時代、甲州から移り住んだと伝えられる住民の先祖が、部落の守り神として祀った社である。近くに山王塚があり、境内には枝が地に垂れる程の松の大木があったと、伝え聞いたことがある。

明治の代になり栗原神社に寄せ宮したが、明治三十年ごろ、芹沢に疫病が流行したので旧の場所へ戻し祀ったという。

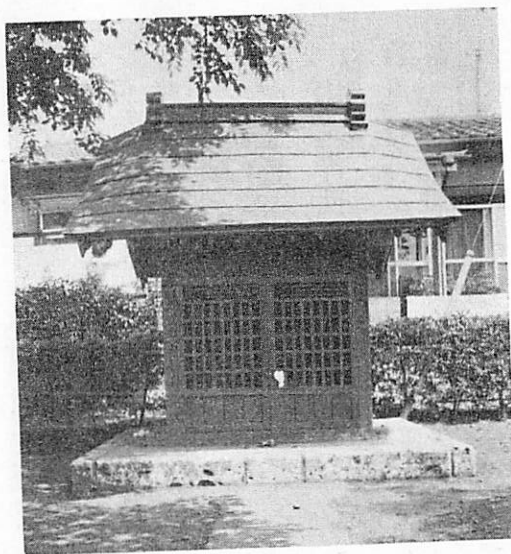


龍 蔵 社



山 王 神 社

現在、地藏尊・念仏供養塔が境内に安置されているが、共に第一水源の坂を登りつめた辻の、左手の小高い所に祀られていたものである。なお境内には、芹沢出身の戦没者の立派な慰霊碑が建てられている。
四月中旬に例祭が行われる。



弁 財 天 社

弁財天社 白髪社を合祀

御祭神 弁財天・白髪大明神

小池の氏神

小池には、地名が示すように小さい池があり、その池が目久尻川の源である。その池から湧き出る清水は絶えることがなく、流域の人々の生活用水となり、農耕の用水となつて、

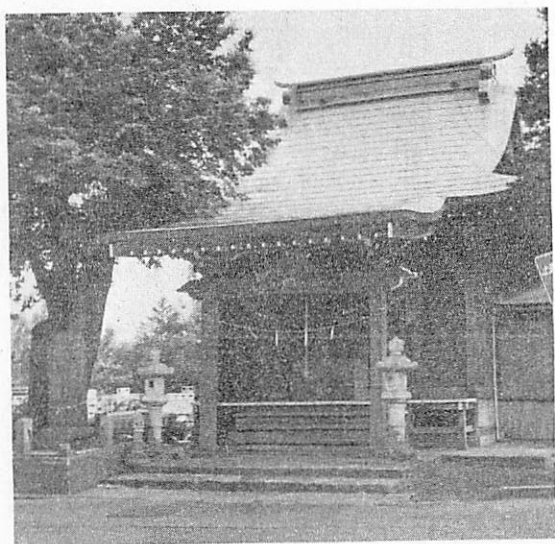
農民の生活を支えてきた。この恩恵に感謝した里人が、池の辺に小祠を建てて祀ったのが弁財天社である。また、養蚕の神といわれる白髪様を、合せ祀ったといひ伝えられている。三月三日を例祭とし、昔は、目久尻川の水の恵みに浴している寒川町から、はるばる代参―村の代表―が見え、神徳に感謝したといふ。

北向庚申神社

御祭神 猿田彦命・青面金剛・帝釈天
上栗原の守護神

甲州から上栗原に移り住んだ住民の先祖が、村はずれのこの辻に建てた庚申塔が御神体である。かつては路傍の庚申塔で、ひっそりと置かれていた時代があった。

昭和のはじめ、眼病を患らっていた皆原の沢田善太郎さんが、芝原の畑の行き帰りにこの庚申様に眼病平癒を祈願したところ、奇跡的に治ったのが契機となり、この庚申塔を信



北 向 庚 申 神 社

仰するものが次第に増えていった。そして昭和十年、地域の人や一般信者の誠意が実って、現在の社殿が造営された。
ことに戦時中は京浜方面をはじめ、県下各地から霊験を信じてお詣りする者が多く、一家の息災や、出征兵士の武運と無事帰還を祈願し、社前は大変な賑いを呈した。

戦後、参拝者は減ってはいるが、地域の人の崇敬の念は厚く、例祭は春の庚申日に行われている。

相武台神社

御祭神 日本武尊

昭和七年十月、城條清五郎氏が栃木県の古



相武台神社

峯神社の御神体を分けて頂いて建てたのが、このお社の起りで、それを近隣の人々が地域の氏神として祀るようになった。はじめ古峯神社とあったが、後に、相武台神社と名称を改め、今日に至っている。市内では新しいお社で、四月に例祭が行われる。

(3) 合祀によって消滅した社

握財社

上栗原ならびに下小池の氏神。村人が甲州から握財大明神を勧請したお社と伝えられる。崇福寺北側に社殿があった。栗原神社に合祀後、その中宮は大和市深見の鹿島社に引き取られた。

下小池の人々は上小池と氏神を異にしていたので、同部落でありながら、お祭りには互に往き来し合ったという。

絹張社

このお社は小池の旧家、加藤氏の屋敷神で絹張大明神を祀った。ところが何時の代にか上小池全体の氏神となった。加藤家の脇の細道を通り、大門坂を登った所にその跡地がある。

栗原神社に合祀された後、その社殿は星の谷の三峯様に移築されたという。

若宮社

社は現在の大矢石油の隣にあつて、社地は約百三十坪余、社殿の外に釣鐘まであったという。中栗原の旧家、通称「オナカイ」から分家した人が、非常に信仰に厚く、王子社の分け宮を祀ったのが起りという。

近隣の小字で「宮の前」という地名は、若宮社の関連からきている。

二、寺院

(1) お寺と檀家

信仰の対象には神の外に仏がある。神は現世の幸福を願う信仰とすれば、仏は来世の極楽浄土をめざす信仰と解することが出来る。

市内のお寺の縁起によると、関東の名刹星谷寺は別として、郷土の豪族・郷土の建立になるものと、住民によって建立されたもの、その他がある。例えば、心岩寺・龍源院・宗仲寺は前者に当り、後者には専福寺をあげる事が出来る。

郷土史に詳しい飯島忠雄氏は、寺と檀徒の關係が生じたのは江戸初期からであって、それ以前には檀家制度はなかったという。

お寺は時の権力者の持仏堂的な性格を持ち、時代の推移と共に、やがて村持のお寺へと変わっていった。村持になっても、村民は葬儀や法要を営む時だけ、寺の和尚に頼んで供養

してもらい、寺との深い係わりはなかった。ところが寺付近の住民が、寺と檀徒の關係を結ぶようになって、お寺の運営が住持と寺世話人によって行われ、その結びつきが次第に強くなっていった。

そのころになると、どの寺も大きな寺の末寺となつて、大寺の宗派に系列化された。

このようになる、お寺の盛衰は檀家の数と、檀家の質に左右される。永い間には運営が困難になつて、無住で過すお寺が生れたことだろう。時には檀家の獲得に努めたお寺もあつただろう。何れにしても栄枯盛衰は世の常で、寺にも栄枯があり、檀家の側にも盛衰があつた。

檀徒は富める者も貧しい者も、一様に来世の極楽往生を念じ、祖先の靈を慰めるため、お寺との結縁を大切にして今日に及んでいる。

(2) 市内のお寺

妙法山星谷寺 真言宗古義派

御本尊 聖観世音菩薩

坂東八番の札所、星の谷観音は、寺の由緒によると千二百数十年の昔、聖武天皇の御代高僧行基が、諸国教化の折にこの地に逗留され、自ら聖観音の御像を刻んで堂宇に安置されたのが、この寺の起りという。

はじめは、北東に当る谷戸の本堂山に建てられていたもので、市内にあるお寺の中では一番古い伝統をもつお寺である。戦国時代には小田原の北条氏が、しばしばこの寺を宿舎に利用したといわれることから、非常に大きなお寺であったことが想像される。永い歳月の間には幾多の変遷があり、いつの時代か火災にあつて現在の場所に移されたという。

今、商店街で賑う大門通りは、星谷寺の参道で、皆原から一直線に星谷寺の仁王門に通じていた。この参道を利用して、明治初期か



星谷寺境内全図
(明治43年3月版)



星谷寺観音堂

は大正期にかけて草競馬が行われ、その後は、星谷寺の境内の周りを何周、何十周とまわる自転車競争が行われたというが、今は昔語りになってしまった。

また、阿吽の金剛力士一対を安置した素晴らしい仁王門があったが、惜しいことに昭和三年三月、類焼の厄に遇って消滅した。

星谷寺の梵鐘は国の重要文化財であり、市の重要文化財にも指定されている。嘉禄三年（七五二年前）近江源氏の佐々木信綱らが寄進したもので、現存する梵鐘のうち、関東では二番目に古く、鐘身の長いことや撞座が一個所しかないことが特徴とされている。

このお寺には、咲き分け散り椿―市の天然記念物―をはじめ、座間音頭に歌われている日中に星が映って見える星の井戸・不断桜・観音草等、七不思議といわれるものがある。

この外、星谷寺には

豊臣秀吉制札・北条氏寄進状

北条氏制札 二通

計四通の文書が保管され、市の重要文化財に指定されている。また、この境内にある壮大な宝篋印塔は、昨年新たに市の重要文化財に指定された。

観音堂の境内と境を異にして、持宝院というお寺がある。この寺の本堂には虚空蔵菩薩が安置されている。星谷寺がここに移ってか

らは、観音堂の維持管理をつかさどり、星谷寺とは不離一体の関係にあるお寺である。

座間山心岩寺 臨濟宗建長寺末（鎌倉市）

御本尊 釈迦如来

協立 文珠・普賢両菩薩

このお寺は、はじめ河原宿現在の西中学校



心岩寺

の東方にあって、久光山心願寺といい、約五百三十年前の文安年間に行った相模川の洪水で、建物等は全部流失してしまったという。

水難を恐れた座間の郷土白井織部是房は、文明二年（五〇九年前）適地をここに求めて堂宇を再建し、座間山心岩寺と改め今日に至っているという。

寺には、市の重要文化財に指定されている釈迦如来立像一体と、岩城常隆供養五輪塔一基がある。木彫の釈迦如来像は気品高く優雅さの漂う立像で、五輪の塔は、小田原攻めの際豊臣方に参加した、福島県平の城主岩城常隆を埋葬した供養塔と伝えられる。

水上山龍源院 曹洞宗清源院末（厚木市）

御本尊 釈迦牟尼仏

水上山龍源院には寺号がない。寺の由緒によると、桜田伝説に出て来る渋谷高間が、寛正二年（五一八年前）、富士山公園の麓丸山下に建てたものを、今から約四百二十年前若



龍 源 院

昭和五十二年、清水の湧き出る傍に小堂を建ててそこに安置した。
 なお、座間小学校の前身風牛学舎が、明治五年この寺に設けられ、市内の子弟はここに学んだ。明治八年八月、大雨のため裏山が崩れ本堂などが倒潰した。この時遭難した風牛学舎の先生、中村常一氏のお墓が寺内にある。また庫裡の玄関は、昭和二十年ごろに座間小学校の玄関を移築したもので、鶴亀の彫刻は昔のままの面影を残している。

休息山遠光院円教寺

日蓮宗本願寺末

(京都)

御本尊

久遠実成本師釈迦牟尼仏

林大炊助が、この地へ移したといわれている。このお寺には弁財天が祀ってある。蛇身の上に女神の首が乗っている、一風変わった形の弁天様である。龍源院二代の格雲がこの地方の人々の幸福を願い、五穀豊饒を祈念して勧請したという。約三百四十三年前のことで、裏山の洞窟の奥深いところに祀られていたが、

寺の縁起によると、開基は鈴木弥太郎貞勝といい、日蓮上人が文永八年(七〇八年前)法難を免がれ、依知の本間重連邸に護送される途中この鈴木家に休息された。その折上人から円教坊の法号を賜わり、深く上人に帰依して寺の建立を思い立ったという。開山は日範で護王姫の伝説にある上人である。

寺の後方に清水の湧き出ている所があつて、三十番神を祀る番神堂がある。これは刀工のために日蓮上人が三十番神を勧請し、地を穿つと清水が湧き出たとの言い伝えがあり、昔、刀工がこの泉の水を用いて刀鍛冶を営んでいたという。現在円教寺が管理している。

山門を入った右側に、明治十年代から三十

年代にわたつて、平塚市四の宮に住み人形浄瑠璃の指導をしていて、座間で死亡した吉田三十郎の墓碑がある。
 寺にある紺紙金泥の法華経写経一巻と鏡一雙が市の重要文化財に指定されている。写経一巻は日蓮上人が法難の折、懐中に所持していたものといひ、鏡は依知の本間邸へ護送される時に、乗った馬の鏡だといひ伝えられている。

来迎山峯月院宗仲寺

浄土宗大長寺末

(鎌倉市岩瀬)

御本尊

阿弥陀如来

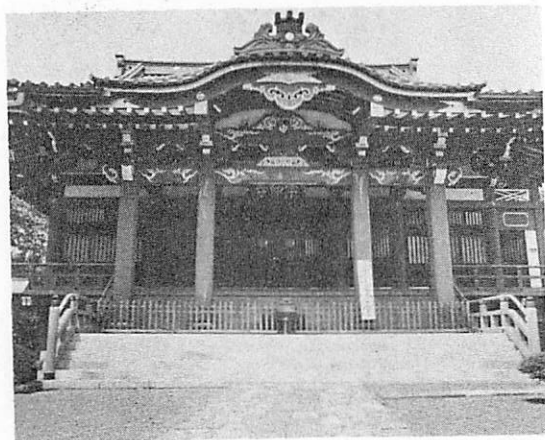
脇士 観音・勢至両菩薩

遠い平安の昔、良真法師が一字の堂を建てたのがこの寺のはじめといひ、その後幾多の変遷をたどつたというけれども、記録がないので判然しない。

現在のお寺は、慶長年間約三百六十余年前当時のこの地方の領主、内藤清成が実父の竹田宗仲のために創建したという。



円 教 寺



宗仲寺本堂

内藤清成は徳川家康の信任が厚く、内藤新宿―東京の新宿―に屋敷地を拝領し、関東総奉行に栄進した人で、本堂の裏手に清成らのお墓がある。開山は源栄といいこれまた家康の知遇を受けた方であった。家康が平塚あたり鷹狩に来た折には立寄られたと言われ、家康の遺骨が、駿府の久能山から日光に移さ

れた時には、一行がこの寺に立寄り休憩された。

このお寺では、大正九年の時の記念日から梵鐘を撞いて、時を知らせたので、畑で作業している農家から大変感謝されたという。

昭和十六年、戦争で国の金属類が極度に欠乏した時、梵鐘も供出させられたので、惜しいことに「時の鐘」は中絶してしまった。

寺宝のうち、市の重要文化財に指定されているものに、六字名号碑一基と、蜻蛉灯籠一基がある。どちらも無言の中に永い間の歴史を物語っている。

昭和五十年、浄土宗開宗八百年を記念し、立派な本堂が改築された。

永照山三昧院専念寺

浄土宗鎮西派
大善寺末（八王子市）

御本尊 阿弥陀如来

脇士 観音・勢至丸両菩薩

由緒によると、このお寺の創建は慶長八年

（三七六年前）で、開基は宮代甚助、開山は念普存貞といわれる。古い記録は安政五年の火災で失われたので、詳しいことは判然しない。この境内に稲荷堂がある。「かさもり稲荷」といって稲倉魂命を祀り、当山十三代の住職が安永二年（二〇六年前）に勧請し、この寺の鎮守にされたという。女性の髪の毛を

この稲荷様に供えて拝めば、性病が癒ると信じられ、瘡守稲荷と呼ばれた。もっとも江戸時代既にこの種の稲荷が、江戸の各所に建てられていたというから、それが伝わってこの稲荷堂が出来たのであろう。

稲荷様は本来が稲の守護神で、震災後再建されたこの稲荷堂は、新田地区の総鎮守稲荷として崇められている。

心光山往生院浄土寺

浄土宗鎮西派
大善寺末（八王子市）

御本尊 阿弥陀如来

脇士 観音・勢至両菩薩

寺の由緒には、元亀年中（約四百年前）に創立、開山は願普聞悦、天正七年九月寂と記される。お寺は始め、四ッ谷の三家の西側にあったが、洪水のため流されて現在地に建立されたという。このお寺も二百五十年前の宝暦十三年に類焼の厄に遭い、八年後の明和八年に本堂庫裡を再建したという。ここ



専念寺



浄土寺

には市内で最も早く寺小屋を開いて、子弟を教育したといわれる、師匠の保田安兵衛（鳥取県出身）の墓碑が建てられている。

栗原山崇福寺 臨済宗建長寺派

御本尊 釈迦如来

言い伝えによると、戦国時代甲斐の国から



崇福寺

この地に移り住んだ甲子太郎右衛門が、開基という。二回程火災に遭い、古い記録等が焼失したので詳しいことは判然しない。
昭和五十三年、建長寺の管長、湊素堂師を招き、宗派の関係者檀徒等百六十余名が参列して、開山四百五十年祭が厳かに、しかも、盛大に催された。

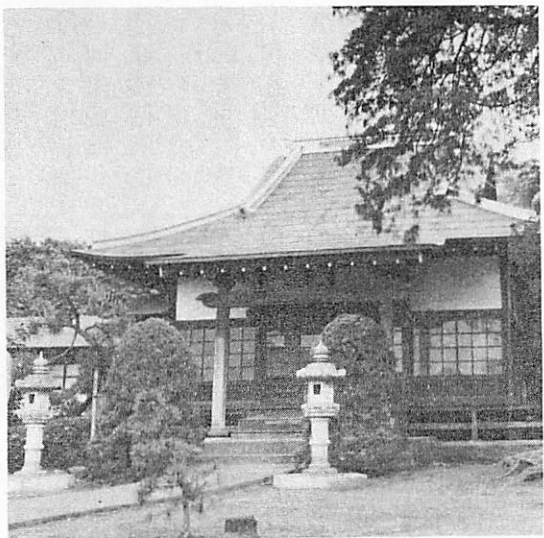
山門の右脇にある、愛児を抱きしめている母親の姿を彫った「子育て地藏」は、母子の情愛を切々と訴えている。

法林山専福寺

浄土真宗高田派専修寺末

(三重県一身田)

御本尊 阿弥陀如来



専福寺

聞くところによると村人が三浦にあった廃寺の寺号を引いて、専福寺を建立したという。開基は了山で、文禄二年（三八六年前）遷化されている。当初は真言宗に所属していたが、第六世了儀の代に真宗高田派に宗派を変え、現在に及んでいるという。

お寺の門標に、座間市教育史跡と書いてある。これは明治十二年に、この寺の境内に洋風二階建の栗原学校が開設され、七十二年間にわたり、栗原地区の数千の子弟がここに学んだ跡で、年輩の人々にとっては、幼いころの幾多の想い出のあるお寺である。

(3) 麿寺

小池山妙禅寺 曹洞宗龍源院末

御本尊 釈迦如来

妙香尼という大木氏の先祖の一女性が、寛永寺で修業し、栗原村に帰って妙禅寺を開山

したという。一説には開山は宝州とも伝えられている。時に寛永五年（三五一年前）。何代かたつて無住となり廃寺となった。山門庫裡は明治八年龍源院に移築された。

安養院

現在、中宿公民館に使われている所にあつたお寺で、約三百六十余年前慶長年間に、長安坊という僧がこれを建てたという。

真言宗古義派に属し、星谷寺の末寺という。本尊は不動明王で、何時ごろ廃寺になったかは不明である。

明治十年ごろ座間宿村はこの廃寺跡に、真誠学校を設置し、明治二十八年座間小学校が創立するまで、座間宿村内の子弟はここに学んだ。

長安寺 浄土宗

新田宿の諏訪明神の東側にあつたという。この付近一帯からは、少し掘ると人骨が見ら

三、民間信仰

(1) 諸々の神と仏

前に述べた神社・寺院の外に、市内には小さな祠、小さなお堂に祀られている神や仏があり、路傍には昔庶民の信仰の対象であつた石造の神仏が置かれている。ここではそうした諸々の神と仏を記すことにした。

稲荷社

稲荷様は個人の屋敷神としての稲荷、同族だけで祀る稲荷、部落の者が建てた講中稲荷とさまざまである。祀る神は稲荷大明神で五穀を司どる神、さらには家を守る神として信仰され、市内全域にわたつて祀られている。

二月の初午の日に「正一位稲荷大明神」と記された幟が立てられるので、その所在を知ることが出来る。

個人で祀つた稲荷は別として、座間に黒沼

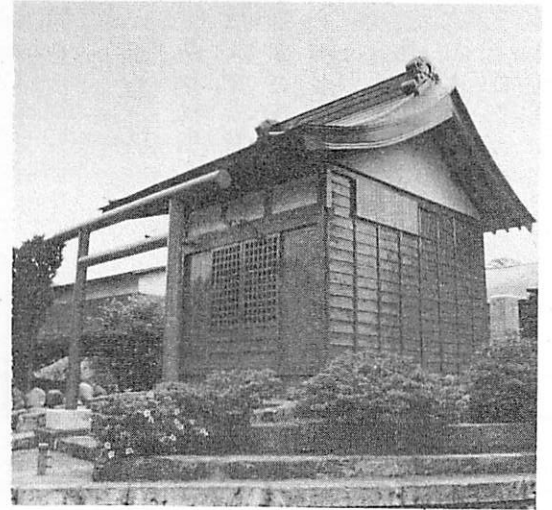
れたという話が伝えられているところを見ると、相当広い墓地を持つたお寺であつたことが証明される。この寺が何時ごろ廃寺になつたか判然しないが、檀家の多くは上宿にある宗仲寺に、一部は新田宿の専念寺に移つたという。

稲荷がある。黒沼一家四軒で祀つたのが始まりで、黒沼一家の鬼門に当るところから鬼門除けに祀つたものだという。現在は近隣の者が仲間に入り講中を作っている。

また座間地区や新田宿には、四方固めの稲荷と称されるものがある。座間の場合、古老の話によると、入谷の飯島七作さん前の稲荷、



座間地区の四方固め稲荷
河原宿の油面稲荷



大下の八軒庭稲荷

河原宿の油面にある稲荷、上宿の泉水稲荷、それに西の六天様という。

新田宿の四方固めの稲荷は、東の北に当る鈴木清治さんの稲荷、西の北に岩堀寅吉さんの稲荷、東の南に当る石川勝さんの稲荷、それに西の南の大河内キヨさんの稲荷という。四社とも二百年前に創建されたと言ひ伝えら

現在、講中の者の外に、近隣からの参詣者が相当多いと聞いている。

道祖神

村への悪霊の侵入を防ぎ、旅行者の安全を守る神といわれている。道祖神と文字を刻んだものが多く、中には神像を二体並べて彫っ



新田宿南の道祖神

れている。

この様な話を聞くと、稲荷様は単に一家、一族の守り神だけでなく、地域全体の守護神として信仰されたとも考えられる。

栗原地区の大下には八軒庭稲荷がある。

伝承によると、天正十年(三九七年前)武田勝頼が天目山の戦に破れた時、家臣の本庄茂長の子、宗正外七名が、この地に逃れて住みつき、八軒で部落を形成したので、八軒庭と呼ばれるようになったという。

稲荷様はここに移り住んだ翌年創建され、その後、元禄十三年に再建、引き続き現在に及んでいるといわれ、当初は八軒の講中だったが、明治初年には十五軒となり、総べて大矢姓を名乗っている。

この稲荷様は神田四・七九アールを所有し、順番に当番を決めて耕作に当り、収入は当番者のものになるが、稲荷講の年間の諸経費は総べて負担し、稲荷様の月二回の清掃も義務付けられた。

た珍しいものもある。

これも市内の旧部落全域にわたって祀られ、栗原方面は主として村外れの辻に、座間方面では部落内の辻に建てられている。

「セーノカミ」または「サイノカミ」と呼び、一月十四日には部落内の者が集り、煤払いに使った竹や、神社の古いお札、正月の注連飾り門松等を燃す、この日、各戸では米の団子を作り、この火で焼いて食べると病気にからないと信じられ、家族みんながこれを食べる習慣がある。また書初をこの火に燃やし、高く舞い上げる程書が上達するとの言い伝えがあつて、子供達は拳こぶしって燃やしたものだ。この行事を「セートバレー」あるいは「団子焼き」といい、五穀豊穰と養蚕祈願を兼ね、正月には欠かせない大きな行事で、現在もお市内各所で行われている。

庚申塔

庚申様といえば、北向庚申神社が挙げられ

るが、市内のお宮の項で既に述べてあるので、ここでは割愛する。

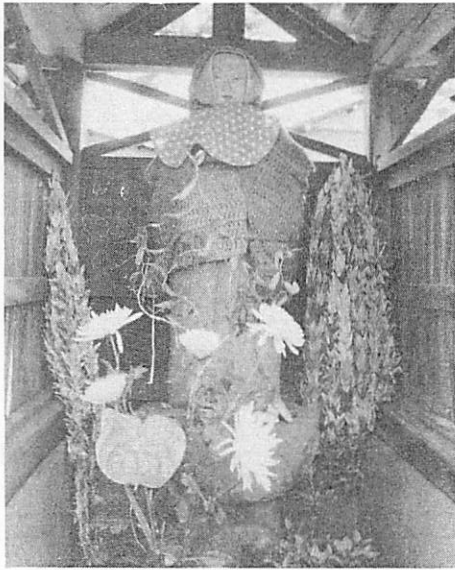
市内に点在する庚申塔を調べて見ると、青面金剛という手が六本もある不可思議な像を刻んだものや、三猿―見ざる聞かざる言わざる―を刻んだもの、道しるべを兼ねたものなどがある。いずれも中国の道教の守庚申から来ているもので、仏教では帝釈天と青面金剛を、神道では猿田彦命を祀ったという。

平安時代に我が国に伝わり、始めは上流階級の間に行われていた信仰で、江戸時代になつて一般庶民の間にこの信仰が広まってきたといわれる。

庚申の信仰は、人間には三尸―三匹の虫―がいて、庚申の夜、人が眠っているすきに身体から抜け出し、その人の悪い行いを神様に告げ、人の命を短くすると信じられた。信者達は見張り役を務める青面金剛を祀って講を作り、その晩は飲食を共にしながら、三尸が身体から抜け出さないよう夜を明かす風習があ

巾を被り誕掛けをしている風情は、何とも言えない趣がある。

個人的に信仰したといわれ、大分昔からの信仰はあったようだ。このお地藏様を信仰すると、長寿になるとか、病気にかからないとか、女の人が安産出来るとか十の功德があるという。お地藏様を拜むことによつて、諸



上栗原の化粧した地藏



新田宿諏訪明神境内の庚申塔

った。現在残されている庚申塔は、かつてそれぞれの地域の人々が塔を建てて、神罰を免がれ、身の延命を願った庚申信仰の跡といえる。

地藏尊

お地藏様も市内の所々で見かける。赤い頭

々の願いごとが叶うというところから、素朴な庶民の間にこの信仰が広まり、子育て地藏をはじめ、いろいろの名前をもった地藏様が建てられ、信仰の対象になったといわれる。

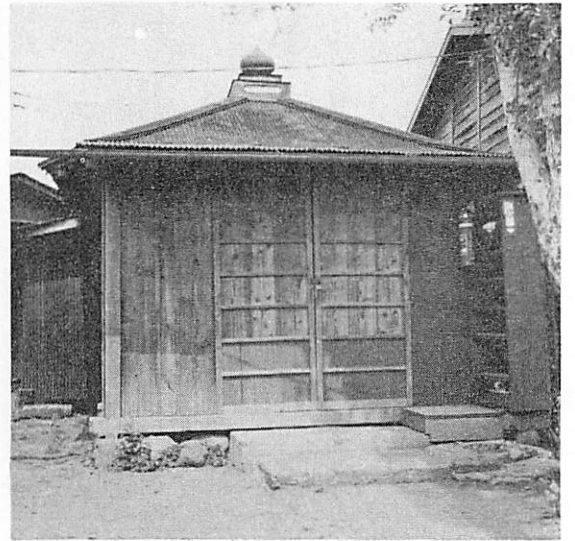
大日如来と不動尊

共に市内には数が少ない。

大日如来

大日様は正しくは大日如来で、太陽のように万物を照らし、万民を育くむ仏様である。中宿にある大日様は石の座像で、今から二百九十六年前に、周辺の人々によつて建てられた。小さな祠の中にましまして四季香華が手向けられている。完全な形で保存され、美しい上に気品を備えていて、市の重要文化財に指定されている。

河原宿にある大日様は、大日堂と言われるお堂の中に安置され、その脇に「嘘をつく舌を抜く」と言い伝えられている閻魔様が、



河原宿の大日堂

共に祀られている。

不動尊

炎の中にあつて、眼を怒らせ牙をかみ、右手に剣左手に綱をもった、恐ろしい形相の不動明王は、悪魔を抑え鎮める仏様で、大日如来の化身といわれる。

乞い神事の御神体となった。一時山王神社に移されたが、また元の場所に戻り、現在座間水源の守り神として安置されている。

丸山不動様は、星の谷谷戸の小田急踏切に近い小高い岡の上のお堂の中に安置されている。むかし、修験僧が本尊として崇め信仰した不動様だといわれている。

薬師如来とおびんずる尊者

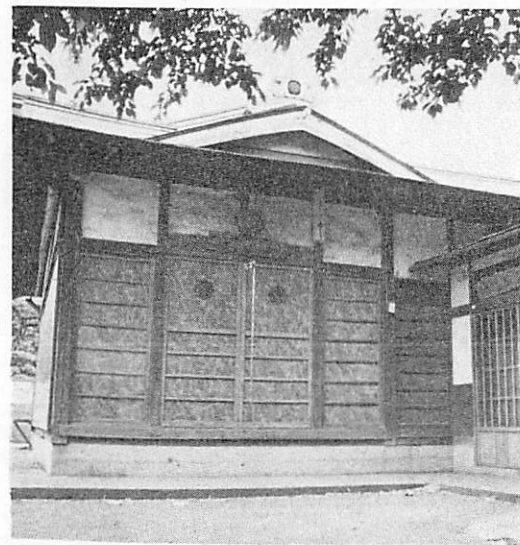
薬師如来

星谷寺の観音堂内に祀られている。正しくは薬師瑠璃光如来やくしりるりくわうにょらいといい、衆生の病苦を救う仏様だという。縁日は毎年十月十二日で、大勢の人が無病息災を祈願するため参詣した。この薬師様の縁日には生姜しょうがが売られた。生姜は薬草の一種で、人間の体内にある毒を消す作用があると言われ、お詣りに来た人々は、みな生姜を買って帰った。

この薬師様にも本堂の裏側に、十二神将

中宿の不動様は、既に廃寺となった安養院のお堂内に祀られ、地区の人々の信仰が大変厚く、十月には地区を挙げてのお祭が催される。

芹沢にある不動様は、石造物で清水の湧き出していた今の栗原第一水源の辺に建てられ、雨乞いの折にはその都度芹沢川に運ばれ、雨



中宿の不動尊

薬師如来について仏教の行者を守る神の像が明治のころまであったというが、借しことに今はない。

おびんずる尊者

おびんずる様も星谷寺の観音堂内に祀られている。病人がこれを撫でて、病気が癒えるようお祈りしたところから、「なでぼとけ」というところもある。眼病をはじめ、万病に効くといわれることを信じて、患者は自分の患部とおびんずる様のそれとおぼしきところを、交互に撫でて、祈願した。

(2) 講について

座間市が農村であったころ、市内の旧部落にはいろいろな講があった。そうした講は、農家の生産に係わる講と、信仰的な講、その他の講に分けることが出来る。



講中の幟を立てた稲荷様

稲荷講

農家に関係深い稲荷様を祭る講で、五穀豊穰を祈願して行われた。この講がどの様に催されたか、八軒庭稲荷の例を述べてみる。

毎年二月一日に講中の者が出て幟を立て、初午の当日には、藁を束ねて丸く拵げ窪みを作った苞とに、赤飯を入れ油揚などを添えて、

いう。甘酒は子供に飲ませるだけでなく、女竹を切って穴をあけ、藁のミゴを通して二つを結わえ、それに甘酒を入れ稲荷様に供えた。稲荷様には前もって、竹竿を両側に立て枝を残しておく。お詣りに行く人は、その枝に甘酒の入った竹筒を下げて参詣した。なお、各自甘酒を持ち帰り、家の稲荷様や、家の中の神々様にもお供えしたという。

海老名方面には、子供を講の日に呼ぶところがあると聞いたが、八軒庭稲荷のように子供を含めた稲荷講は市内ではここだけである。地区にはそれぞれ前からのしきたりがあり、前日幟などの準備をし、前の晩から宿に集り赤飯等を炊いて飲食を共にし、次の日また宿に出向き食い祭をするところと、当日一日限りのところがある。ただ共通して言えることは、稲荷様を祭り、飲み食べみんなで楽しい一刻ひとときを過ぎた点である。

宿も、昔はたいいてい講中の輪番制で行われていたが、下宿などではそれをそのまま現在

講中の者めいめいが稲荷様にあげに行き、時間を見計らって宿に集り、大人は酒、子供は甘酒でお祝いをする。

子供の場合は、三才から十五才迄の男女を問わず本膳をつけ、一人前の扱いで、大人より先にご馳走になって大人と交代する。お昼を中心に午後三時ごろまでで、宿に行く時には必ず八寸重箱を持参し、食膳の食べ残した物は全部その重箱に詰めて、持ち帰る風習があった。

当日講中の女子おんなしは宿へゆき、朝の八時ごろから準備にかかり、出来た料理はまっさきに稲荷様へお供えした。今でもこの時使った早膳が一組、お稲荷様に残っているという。女の人は子供や男衆が済んでから、最後に御馳走を頂いた。あの時食べた、きんぴら・白あえ・なますなどの味は忘れられないと、当時参加した人々は述懐していられた。また当日大根の浅漬を出すのは宿の役目で、当番の家ではその年いつもより余分に大根を作ったと

も近隣交流の場として継承しており、最近は家屋構造その他の要因で、宿を他所に移し、旅館・料理店で行う傾向が見られる。

なお、稲荷講の折には将棋を指し唄を歌い、色々余興をして皆で楽しんだようだ。例えば、皆原では稲荷講の席上、「ホツ引き」をし籤くじに当たった者への景品は、一等雨傘一本、二等ロソク一箱で、その年に当り籤くじを引いた者は、次回の抽籤くじひ権は与えられなかったという。

地神講

市内各地で行われた講で春秋二回催された。講の日は、春は春分に近い戌いぬの日に、秋は秋



地神様の掛軸
(大下、八軒庭所蔵)

分に近い戊の日とされていた。

大地を司どる神を祭り、春は作物の成育を祈り、秋は収穫のお礼参りをする。この日に土いじりをする、土の神の天罰があると言い伝えられ、農家では仕事を休んで宿に集り、堅牢地神という神を祀り、食事を共にした祭りである。戦時中、食糧事情が悪化した時、この講を取り止めるところが多くなり、次第に影を潜めていった。

かいこ日待

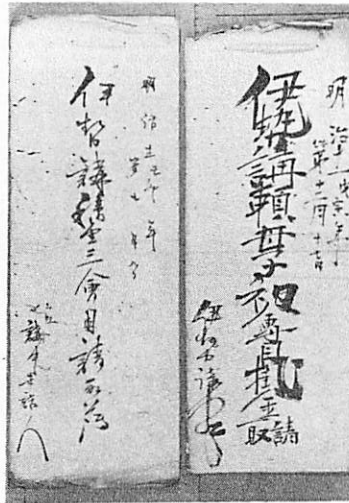
農家の大切な生活資源である養蚕によって生れたのが、「かいこ日待」である。年の始めの一月十日、あるいは春の三月十日、養蚕が一段落ついた十月に感謝の意味をもって行った所、さらには春秋二回した所など地区によって違う。

蚕の神、こかげ様、所によってはしらがみさまの軸を下げ、その前に講中の者が集り、宿で用意した料理と一緒に食べてお祭した。

十二月十五日が年寄り、年二回伊勢講を催した所もある。

昔は、この講の席で籤を引き、当たった者が講を代表してお伊勢参りをした。その時、講に居合わせた者は、何分か餞別を代参者に贈った。

代参者何人かは出立の日の早朝、氏神様に詣で道中の安全を祈り、家族や講中の見送りを受けて旅立った。お伊勢参りは座間の場合、新田宿・厚木等から、相模川を舟で下り、馬入に着き平塚から東海道を西に進み、名古屋・桑名・津・松坂を経て伊勢に至り、内宮・



横帳に記した積金の伊勢講 (新田宿・波多野家所蔵)



かいこ日待の掛軸 (河原宿・渡辺家所蔵)

蚕は稚蚕のうちから主に女子が世話をしたので、宿に集まる者は女衆が多く、かいこ日待を女の日待と呼ぶ所もあった。
なお、この席で余興に「ホッ引き」をし、景品がもたらえた。このホッ引きは昭和の十年ごろまで行われたという。

伊勢講

講中の者が宿に集り、伊勢の大神宮の軸をかけ、お灯明を点し食膳を供え、その前で持参りの食い祭りをする。講の日は一定していない。稲の刈取り前の十月に行う所もあれば、星の谷地区のように十一月十五日に若い衆、

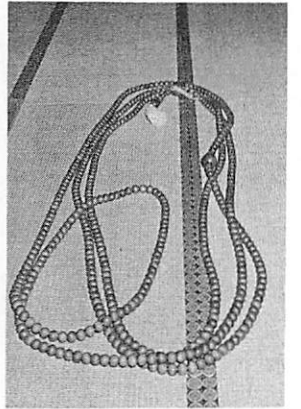
外宮を参拝し、帰りは奈良・大阪・京都まで足をのばし、途中の名所旧跡などを見物しながら帰るので、一ヶ月近い日数を要し、大磯から厚木に抜けて座間に帰ったという。

代参者の講中へのお土産は、餞別のお返しに色絵とお札を、特別の人には大神宮の掛軸や厄除けのお守りを添えたという。

代参によるお伊勢参りは明治の中ごろまで続いたようだ。それ以後は汽車による集団での参拝に変わっていった。現在、一部の地区になお、伊勢講が残っている。

念仏講

宿に集り仏像または画像を飾り、香華や食膳を供え、講中の者が二列に座ったり、丸座になって鉦を敲き、「南無阿弥陀仏」と節をつけて唱える。所によっては座敷一杯に拡がる大珠数を廻しながらお念仏を唱えた。何百回唱えるかは決っていないようで、適当なところで切上げ、後は「おとき」仏事の時に



大じゅづ

出す食事となる。この場合の食事は宿持であった。宿は輪番であったから、この様な仕きたりが生れたものと思われる。

芹沢では野天に筵を敷き、念仏碑の前に講中のお年寄りが集まり、お念仏を唱えていたという。この講も、時の移り変わりと共に絶えた所が多く、最近になって途絶えていた念仏講が復活した地区が出て来た。

不動講

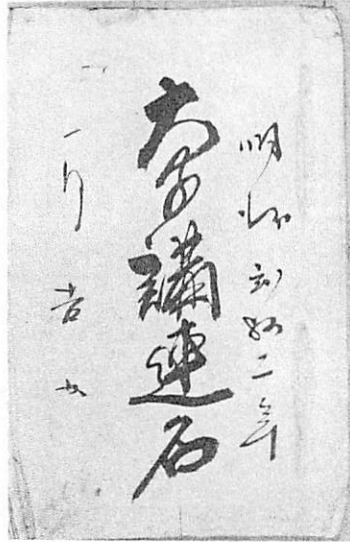
不動講も念仏講と大体同じ方法で、異なる点は机に安置されるものが不動明王で、鉦の代りに拍子木をうち、不動真言の唱えごと、

た金がある額に達した時、抽籤して当たった者が、お金を借受けられる仕組である。

返済は二年とか三年とかの年賦で、期限内に利子をつけて返す、昔の庶民の金融機関の役割をした講である。

この講は飲食を共にするもので、唱え言はない。

この外に、えびす講と太子講がある。えびす講は七福神のうちの恵比須様を祀るもので、十一月二十日、または、一月二十日に行われ



太子講連名簿
(新田宿・浜島氏所蔵)

「ノオマクサンマダバ、サラダン、センダン、マカラシヤナ、ソワカヤウンタラタ、カンマン。」

をみんなで合唱する。この唱え言は、三十三回繰り返すのが決まりのようである。

この不動講が、現在も引続き行われているのは中宿・河原宿・中河原で、毎月講の日を定めている。また、年間一回にした所もある。



皆原の不動講塔

無尽講・頼母子講

名称は違っても内容は同じで、講中の者が決められた幾ばくかの金を積み立て、集まっ

る。この日、恵比須様に空財布をあげて、お金がはいり様、祈った家もあり、供え物を何故か未婚者は食べてはいけない風習の所もあった。

太子講は、建築業者による講で、聖徳太子を奉賛し、二月二十一日が講の日である。

四、俗 信

(1) 妖 怪

一つ目小僧

十二月八日を「ヨーカーゾウ」または「ヨーカードウ」と呼んで、座間市内では一つ目小僧が来ると信じられ、どこの家でも目籠・フルイ・大籠等を戸外に掛け、下駄などの履物は家の中へ入れたものである。子供が下駄など出しておく、一つ目小僧が各戸を廻って帳面に記し、その帳面を「セーノカミ」（道祖神）に預ける。ところが一月十四日の団子焼が済んだ後、一つ目小僧がやって来てその帳面を見せてくれと言っても、「セーノカミ様」は火事で燃えてしまった。と、いっこうに取り合ってくれない。一つ目小僧はそれでは仕方がないといって諦めるので、悪い子にされずに済むという。八日の晩、外においた下駄

を履くと足が腐ると、言い伝えられている所もある。また、目籠などを外に掛ける風習は、自分より目の多い怪物がいるので、一つ目小僧の方が恐れをなし、その家へは近寄らないと言われていた。

この様な習わしのあった芹沢地区に、幻の一つ目小僧が実在していたことが立証されたので、当時の人々がアッ!!と驚いたのも無理はない。もっともこの一つ目小僧は、「ヨーカーゾウ」の一つ目小僧とはかわりがない。話は昭和七年六月のこと、土葬のための墓穴掘りの当番（芹沢では山番という）に当たった大矢菊次郎さん外二名が、当時畑に囲まれた小池某氏の墓地を掘っていた。その時、偶然堀り出した頭蓋骨が、何と眼窩が一つ、その上二本の角らしいものが額に生えた、不気味なものであった。

その日はまた元通り埋めてしまったが、この話を聞いた故飯島要之助翁は、その年の八月、いろいろの手続きを取って、当時の栗原

狐の提灯

夏から秋の始めにかけてよく見かけたものに、狐の提灯がある。暗い彼方にちょうど提灯にろうそくの火を点した様な色の火が、チラチラとついたり消えたりしながら燃える。

時に十個位、列をなして燃えるかと思うと、次第に消えて二個位になり、見ていると提灯の火が往ったり来たりしているように見える。この灯のことを人々は狐の提灯と呼び、市内では所によって百八灯とも言った。

新田宿では入谷の桜田から根下の方向に見たといい、他の地区では山の傾斜地に、あるいは原の向うの林のすそに見たという。

昭和十年代までは見られたようだが、現在では見ることは出来ない。

狐に化かされた話（大矢菊次郎氏談）

農が三十五か六のころだと思ふ。仕事の帰りに綾瀬の早川のお宮の下を通って来たが、どうもその辺で狐が憑いたらしい。ちょうど



一つ目小僧地藏菩薩

駐在所の及川巡查に立合って貰い、墓を掘り返してそれを確認された。その頭蓋骨は一時専福寺に預けられ、後に上栗原の崇福寺に移され埋葬されたという。

どこから来たものか、人目を避けて山野を放浪し、野性化していた一つ目小僧は、狼（山犬）に襲われて果てたものらしい。その死骸を見つけた人達が最寄りの墓地へ葬ったのが、計らずも山番の手によって発見されたのである。大変信仰心に厚い小池氏宅では、自分の墓地に無縁の一つ目小僧の石像を造り「一つ目小僧地藏菩薩」として供養されている。

雨のシヨボ降る晩で、方角がトンとわからなくなつてしまつた。しばらく行つてふと見ると、洋傘をさし草履を履いた、奇麗な女の人が立っている。「大塚へは、どう行つたらいいかね。」と、尋ねたが、黙つたまま立っている。何とか返事くらいしたいのになと思ひながら通り過ぎ、後を振り返つて見ると女の姿は消えていた。幸い、人家の灯りが見えたので、その家へ飛び込んで大塚への道を尋ねたら、それが何んと赤坂（海老名市）の顔見知りの家だつた。それから気持も落ち着いて来て、迷ふことなく家へ帰ることが出来た。家へ着いて自転車の荷掛けをみると、つけて置いたはずの弁当箱が失くなつていた。

昭和十五・六年頃 芹沢

この話の外に、相模川の釣りの帰りみち、入の谷戸で狐が化けた小僧さんに出合つた話、青年学校の夜学からの帰り、今の栗原中学校の付近で、お月様を二つ見た話（以上芹沢）、

まことに天界は不思議という外はない。

本人が死ぬ前に人魂を見た

佐太郎さんが夕方畑仕事を終つて、道端の大きな柿の木の根元に腰をおろして、一休みして見た。見るともなしに西の空を見ていると、自分の家のお墓の方角から青白い火の玉がフワッと上つた。「アッ、あれは人魂だ」と小声で叫んで立上り、さらに見詰めてみると、静かにフワフワ飛んでいた青白い火の玉は、スーッと消えた。急いで家へ帰つてきた佐太郎さんは、さっそく今見てきた人魂の様子を、家の人に話した。家の者は、何か変り事がなければよいがと心配した。ところが、人魂を見たという本人が急に病の床につき、二日後には永眠されたという。大正八年十二月のことである。

（芹沢）

死者の前触れ

円教寺に海静という上人がおられた。この

また、皆原・中宿・新田宿でも狐に化かされた話が出た。なかには着物の裾を尻までまくり上げ、「おお、ふけえー、おお、深けえー」と、いかにも深い川か堀を渡るとき仕草をしていた話など面白おかしく伺つた。

どんな心理状態で、このような幻影を見るのか、真実狐に化かされてのことか、摩訶不思議という外ない。

(2) 予兆

昔は、鳥鳴きが悪いと変り事がなければよいがと心配した。こんな時、近所とか親戚に何かと不幸が出来た。大正十二年九月の関東大震災の折、皆原の人々は地震の起る前に、鳥の異様な鳴き声を聞いたという。

また、相模川べりの蜂が巢を高い所に作ると、その年には大水が出る、台地の蜂が巢を低い所に作ると大風が吹く、火事の起る前には、その家から鼠が逃げだしていく、等、よく聞いたものである。

上人が眠っていると、真夜中に本堂で、ドシン、という大きな音がした。何の音だろうと本堂へ様子を見に行つたが、別に変つた気配がない。気のせいかなと思ひながら床に入ると、また本堂で音がした。ことによると、檀家で不幸が出来たのかも知れないと思ひながら、眠つて朝を迎えた。すると朝早く使が見えて、檀家の誰さんが亡くなつたという。やっぱり、昨晚本堂で大きな音がしたのは、亡くなつた人の魂が、寺に見えたその音だったのかと感じたという。（昭和の始め、入谷）

(3) 禁忌

棘のある木は育たない

小池にあった絹張様は女神で、時おりお社から抜け出しては、小池の部落をご巡幸になつた。ところがある日、お廻りの途中どうしたはずみか、柚子の棘が神様の眼に刺さり、

大変お困りになった。

それからというものの、小池の地区では、柚子・密柑など棘のある木を忌み、植えても育たないという。

敲いてはいけない太鼓

明治の始めに、栗原神社に合祀された、絹張様の太鼓を、氏子の草薙家で預っていた。太鼓の高さは約六十cm位だったろう。お宮の太鼓というので、物置の天井裏に大切に保管していた。

ある夏の日、太鼓好きのお爺さんが、天井裏からその太鼓を下ろして敲いて見た。そして、たらの歳の暮に、幼い孫が大火傷を負い、不幸にも亡くなってしまった。それからはその太鼓は絶対鳴らしてはいけないと言って、指一本触れることが出来なかった。

草薙家では母屋を改築された時、その太鼓を収納する特別の場所を、玄関の天井裏に造

に歩く時、どんなに遠回りになっても、この道だけは避けて通る仕来りである。おそらく大変めでたい時に、仏事に関連のある巡礼が通る道というので、それを忌み嫌って、このような仕来りたりが生れたものと思われる。

上栗原にも花嫁の通れない道があった。武井亥助氏の北側の道路で、今は拡幅されているが昔は細い道であった。なぜこの道を花嫁が通ることを忌み嫌ったかというのと、その付近を通称「オンダシ」といい、花嫁を追い出す、という不吉な連想によるものだろう。

転んではいけない坂

星谷寺の観音堂の裏を、護王姫社に通じる道は鎌倉古道と呼ばれ、その中間に通称「三年坂」という坂がある。狭い坂道でどういふ訳かこの坂で転ぶと、三年以内に死んでしまう、と、昔から言い伝えられている。

転んで実際に死んだ人がいるのか、いない

り、丁重に保管されたという。

花嫁の通れない道

下栗原の龍蔵様の前を東西に走る道を、巡礼街道と呼んでいる。この道は何故か昔から花嫁は通っていけない道になっている。この土地に嫁いで来た花嫁が、部落内を挨拶廻り



巡礼街道（下栗原）



三年坂

のか、その辺は判然しないが、ともかく不思議な言い伝えのある坂である。

(4) 雨乞い

現在のように都市化して来た座間市では、

雨乞いの行事は昔語りになってしまった。
天候が不順の年で早天が続くと、農作物が全滅する恐れがある。このような時に農民は雨を求めて、雨乞いの神事をしたものである。

入谷地区

座間市の雨乞いで特に変わっているのは、鈴鹿明神社の境内で行う「龍神いじめの神事」である。これは明神様の池の水をかい干す行事で、入谷全地区の人々が、バケツや盥（あらい）を持って集まり、雨を降らせ給えと念じながら、池の水が空になるまでかい出す。この池には昔から龍を彫った石が沈めてあるといわれ、池の水をかい干すと龍神は困って水が欲しくなり、雲を呼んで雨を降らせるといふ。大変珍しい雨乞いの行事である。

座間地区

座間地区五つの部落、上宿・中宿・下宿・河原宿・中河原の者が総掛りで、鳩川の真菰

うに降り注ぐ水をジッと我慢する。水飛沫（しぶき）をあげながら三十分の間、真剣に水を掛け合う。

雨乞いが終わった後も不動様はそのまま川の中に置かれ、雨が降って始めて元の場所に納められる。

なお、雨乞いの使者は、行きには何回休んでもよいが、帰りはどんなに辛くても休んではいけないとされていた。帰りに休むと、休んだ村に雨が降り、自分達の村には雨が降らないと信じられていたからである。

雨が降ると、庭場長―現在の自治委員長―は雨降り正月の触れを出し、農家は三日ぐらい仕事を休んで喜び合った。

次に、畑作地帯の雨乞いの概況を紹介しよう。

弁天様の池に集まり、阿夫利神社から頂いてきたお水を、弁天様の祠に振り掛け、引続

などを奇麗に刈取り、水の流れをよくし、これが終ると座間神社に各部落役員が集まり、雨乞いを祈念したという。このとき代表者が大山の阿夫利神社にお詣りをした。

栗原地区その他

栗原地区は座間・入谷と違い、農作物を畑地に依存する度合いが大きいので、早天続きの年にはそれぞれ小字で雨乞いをした。

芹沢地区の例

芹沢川の川幅の広い場所に、四方に注連縄（しづな）を張り、その中に不動尊を安置する。部落から選ばれた三名の者がお水もらいの使者となり、真夜中に立って阿夫利神社に詣うで、神官に雨乞いの祝詞を上げてもらい、お札と竹筒に入れたお水を頂いて来る。使いの者はそのお水を安置された不動様に振り掛け、集まった部落の人達が雨乞いを祈念する。そして不動様と使者に向って、一斉に川の水を振り掛ける。使者は不動様の前に屈んで、滝のよ

いて皆でその祠に池の水を掛けて雨乞いをする。
(小池)

阿夫利神社または半原の滝から、お水を頂いて来て、増屋ストア近くの日久尻川に立たお札にその水を掛ける。お札を中心に二手に別れて水を掛け合う。
(上栗原)

栗原神社の池に、木彫の天邪鬼（あまのまがひ）を注連縄で結び付けたのを飾り、阿夫利神社のお水を振り掛け、皆で天邪鬼めがけて池の水をかける。
(中栗原)

大山または半原の滝から、お水を頂き日久尻の川にまき、皆で水を掛け合い雨乞いをする。
(下栗原)

阿夫利神社から頂いて来たお水を薄め、それを、お札を先頭に下栗原一帯の田んぼならびに上の原の畑地にまいて歩く。
(中下)

大山の不動様から頂いて来たお水を、棒の先に付けた棒とお札に振り掛け、その棒を持って大塚の通りを歩く。この時、通りに面した人達はお札目がけて水を掛ける。菊田医院の脇の坂を下って寒川橋の所で川に入り、そのお札・棒の付いた棒を中心に皆が水を掛け合う。

(大下・大塚)

腰越の靈光寺の池の水をもらい、小松原にある小さな祠の前に日蓮様の肖像を掲げ、頂いて来たお水を供えてお祈りする。それからそのお水を畑へまいて歩く。引続き水垢離をしお題目を唱えて雨乞いする。雨が降ると雨水を持って靈光寺にお礼参りする。

(小松原)

休みを知らせる方法

地域の人達に休みを知らせる方法は、地区によって違う。部落の長が明日は雨降り正月でお休みと、各戸言い継ぎで知らせた所と、

五、民間療法

医者がなかった時代、人々は病気にかかる、神に祈願してお百度詣りをしたり、祈禱師を招いて病魔退散を祈ったり、まじない師にお願ひしたり、長い生活経験と知恵から造り出された家伝薬などに、すぐるより外その術はなかった。

現代医学の立場から見れば、まことに幼稚な療法であり、中には非衛生的な療法もあったが、当時の人々は、このような療法によって生き長らえて来たのである。

(1) 民間薬

眼病の特効薬

鈴木タネさん(旧姓小清水)この方は、医療に大変詳しい人で、独自の製法による目薬

地域で前もって触れ歩く特定の人をお願ひし、その人に、

「あした正月ヨー。」(簀入り・盆の時)

「あしたおしめり正月ヨー。」(雨乞い)

と大きな声で地域の人々に休みを知らせた所がある。

は眼病によく効いたという。どのような製法か、後継者に伝授されなかったので、明らかでない。

(大正末・没) (新田宿)

腫物・切り傷・火傷に効く薬

池上太蔵さんは、壮年になって横浜の某薬劑士宅に勤め、その間に白い練り薬を習得された。この薬は蛤の貝殻に入れておいて分けあげたというが、腫物を始め切り傷・火傷にもよく効き、大変評判がよく遠方からも買いに来たという。(昭和七年没) (新田宿)

その他の療法

池田ハマさんは、肩のこりや、目ぼし―眼の充血する病氣―を治された。背中に種油を塗り、トースミに種油を浸みこませて火をつけ、それを「つぼ」につけるのがコツで、パチパチとはねる。はねるほうが熱くないという。生存中、頼まれると治療されたが、現在後継者はいない。(昭和二十一年没) (新田宿)

(2) 呪い

今から約百二十年前、星の谷の山田某が旅の修験者から、呪いの法を伝授され、腫物・夜泣き・寝小便その他の呪いを覚えて、人々に施したと伝えられているが、比較的年代の新らしい呪いによる療法について述べてみたい。

あいかぜが治る

見上さんは「あいかぜ」の呪いをされた。実際に治療を受けた、患者の話を要約すると次のようである。

煮えたつたお湯を入れた鍋の上に棒を渡らし、台などに腰を掛けた患者は両足をその棒の上に乗せ、単衣の着物などで前を覆う。患者の前に立った見上さんは、あらかじめ用意した箕に何やら文字を書きながら、となえごとを唱え、唱え終るとその箕で患部をフワッと煽ぐ、これを三回繰り返す。不思議と

痛みは和らぎ治ったという。昭和十年代の話である。なお、あいかぜとは、腰や脚に痛みを感じる病氣という。(大塚)

漆かぶれが治る

中村さんは漆瘡を治された。この方は父からこの呪いを伝授されたという。実家の曾祖父、三郎左衛門という人が、どこからか覚えて来て伝えた。

一握り程の麦藁を円形に結んだものを、幾つか用意する。その麦わらを燃やし火の上に文字を書き、前もって用意しておいた、洗面器の奇麗な水に手を浸し、濡れた手で患部をひたひた叩き、そして患部を火に炙る。これを数回繰り返す。この呪いによって、大抵かぶれは治ったという。昭和四十年代の話である。(下栗原の上)

疣をとる

宮代さんは新戸から呪いの法を覚えて来て、

疣をとる呪いをされる。

となえごとを三回唱え、あらかじめ用意しておいた盃一杯の白米を、磨った墨汁に混ぜ、それを半紙にくるんで患部を三回撫でる。半紙にくるんだお米は、終ったらドブの淵に埋める。一年以内に疣はとれるという。

子供の疳の虫を治す

宮代さんは子どもの虫に効く呪いもされる。子供の手のひらに文字を三回書き、その手のひらに塩をのせて握らせる。これを一週間おきに三回施すと治るといふ。(新田宿)

あとがき

冒頭、発刊の経過について述べましたように、私達、語り伝え聴き取り調査団は、調査の趣旨をふまえ、出来る限り先輩からの語り伝えの記録を尊重し、それを活かすことに意を用い、さらに追跡調査等を行ってその補完に努めて参りました。

今、稿を終え、静かに顧みる時、記述の面や内容の点で、色々ご批判もあろうかと思えます。また、項によっては語り伝えの資料が不十分で、資料の掘り起し方の不足を感じております。

なお、本編に写真を多く挿入したのは、読者の視覚を通して、直観的にご理解頂きたいとの意図によるものであります。

これを機会に、市民の皆様から、お手許にある資料をお寄せ頂き、座間市史資料の充実にご協力賜わりますよう、切にお願いいたします。

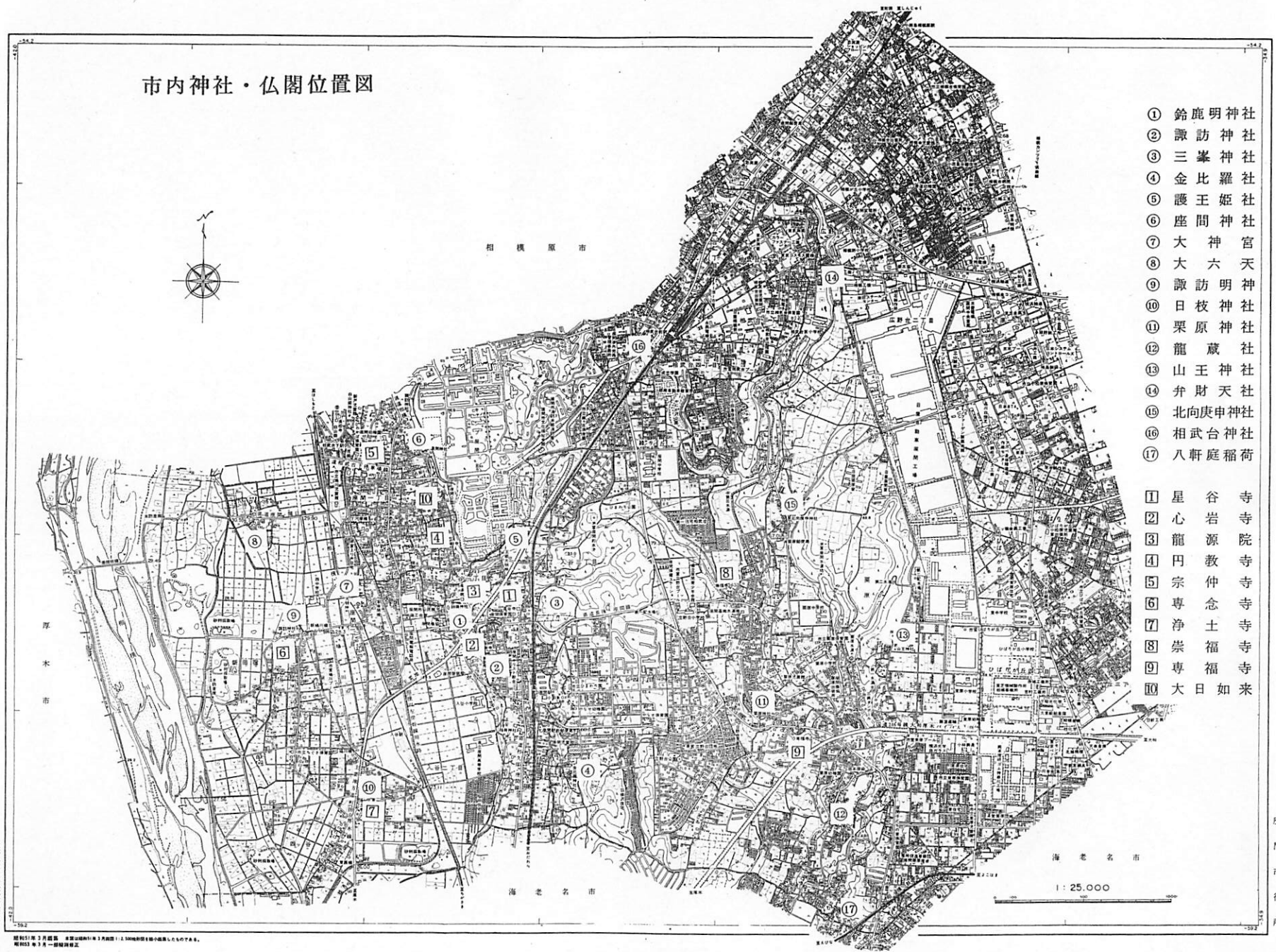
(大沢記)

語り伝え聴き取り調査団

座間市文化財保護委員	飯島忠雄
同 教育委員	井上治夫
同 教育委員	○大沢清
同 文化財調査員	小俣国栄
同 文化財保護委員	鈴木芳夫

○印団長 (いろは順)

市内神社・仏閣位置図



- ① 鈴鹿明神社
- ② 諏訪神社
- ③ 三峯神社
- ④ 金比羅社
- ⑤ 護王姫社
- ⑥ 座間神社
- ⑦ 大天神宮
- ⑧ 大六天
- ⑨ 諏訪明神社
- ⑩ 日枝神社
- ⑪ 栗原神社
- ⑫ 龍蔵社
- ⑬ 山王神社
- ⑭ 弁財天社
- ⑮ 北向庚申神社
- ⑯ 相武台神社
- ⑰ 八軒庭福荷

- ① 星谷寺
- ② 心岩寺
- ③ 龍源院
- ④ 円教寺
- ⑤ 宗仲寺
- ⑥ 専念寺
- ⑦ 浄土寺
- ⑧ 崇福寺
- ⑨ 専日寺
- ⑩ 大如来

昭和17年3月編纂 海老名市役所
 昭和22年3月一刷再版

海老名市役所

座間の語り伝え
信 仰 編

初版発行 昭和五十四年十月一日

三版発行 昭和六十一年三月一日

編集者 語り伝え聴き取り調査団
図書館市史編さん係

発行者 座間市

座間市入谷一丁目三〇六七
電話 〇四六二(55)一一一一

印刷所 楠文教堂印刷

座間市座間一丁目三一四五番
電話 〇四六二(55)五五五〇